SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

加藤周一と翻訳の問題：日本の戦後知識人作品の翻訳紹介を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ルボフスキ伊藤, 綾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029584

加藤周一と翻訳の問題
――日本の戦後知識人作品の翻訳紹介を通して――

ルボフスキ伊藤綾
（ジュネーブ大学）

1　ジュネーブグループによる取り組み

本稿は、筆者が主に加藤周一の「日本文化の雑種性」のフランス語翻訳および加藤周一を中心とする日本の知識人の思想のフランス語圏への紹介に関わった経験から出発して、加藤周一における「翻訳」の問題について考察を展開したものである。

「日本文化の雑種性」のフランス語訳が収められている書籍のタイトルは、*La trajectoire du Japon moderne. Regards critiques des années* 1950である（日本語で訳すとすれば「近代日本の道程　1950年代の批評の眼差し」となる）。同書はフランスのレ・ベルレットルという出版社から2018年に出版された。日本の戦後を代表する知識人の基本的な論考をフランス語で紹介するという目的のもとで編まれた本であり、具体的には、加藤周一の「日本文化の雑種性」、鶴見俊輔の「知識人の戦争責任」、橋川文三の「日本浪漫派批判序説」、竹内好の「日本のアジア主義」の翻訳および解説を収録している。

本書で扱った知識人作品の選択や翻訳の実行は、ジュネーブグループ（Groupe de Genève）というスイス州立ジュネーブ大学文学部東アジア研究科日本学科の教員たちによる研究会での合同作業が元になっている。各思想家につき、２名の担当者を決め、二人で訳おこししたものをグループ参加者全員で研究会で確認するという作業を行い、解説は、それぞれ担当者が執筆した。このジュネーブグループのプロジェクトは、2011年から12年にかけてスタートしたもので、この本に先立ち、同研究会で同出版社から2014年に*Japon colonial* 1880-1930. *Les voix de la dissension*（日本語訳『植民地時代の日本1880－1930年　意見衝突の声』）というタイトルで、近代日本に胚胎した帝国主義、植民地主義に異議を唱え、決定的な影響力こそ持ちえなかったものの、たしかにそれらに抗した日本人たちの言論を集めた本が出版された。

ジュネーブグループが手がけたこれら二冊の本は、レ・ベルレットルの日本研究叢書のノンフィクションの部門から出版されており、そこには共通した方向性がある。それは簡単にいうと日本についての「クリシェ」を打破する目的である。コレクションの表紙の裏に書かれているスローガンは次のようなものである。

> 日本人は審美的なものには長けているが、論理的なものにはそれほどは長けていないようである。微に入り細を穿つ洗練を好んでも、現実を直前することは全く好まないようだ。このような正しいとはいえないイメージを修正するために、西洋では知られていないものの、日本の思想史においては重要な役割を果たした作品を日本語から直接翻訳して提供する。

まず、日本に対するクリシェがあり、それは、日本人にはraisonnementが欠如している、つまり、論理や理性がないというものだ。そのうえで、そういったクリシェに反駁しなければならないと言われている。このような問題提起自体は、もちろん、フランスの日本学者の完全な善意から行われたものであろう。ただし、これを聞いた日本人はどのように感じるだろうか、という疑問も生じる。というのも、この定義は、ある種の二重否定に基づいているからだ。それは、あたかも「多くの人はあなたが賢くないと言ってるけれど私はそう思わない」というような、人を複雑な気持ちにさせる誉め言葉に酷似しているのではなかろうか。

このスローガンおよびジュネーブグループができたきっかけに、会の発起人であったフランソワ・スイリ氏（ジュネーブ大学名誉教授）が語ったひとつの逸話がある。フランスから社会学者ピエール・ブルデューが来日した折に、彼から「日本には知識人はいるのか」という無邪気な質問を受けたという逸話だ。それを聞いて日本学者のスイリ氏は非常に複雑な感情を覚え、日本の知識人の紹介を日本の外に向けてしなければならないと思ったという。それは、普遍を標榜する西洋知識人の「偏狭」を批判しなければならないという要請でもあり、先にあげたレ・ベルレットルのスローガンとも通じている。一般に、西洋の日本学者が直面することが多いように思われるこの問題は、また、日本人の外国、特に西洋文化研究者にとっても無縁であることが難しいといえる問題ではないか。

日本と西洋の非対称性。例えば、モダニズムの終焉が広く議論されていた20

世紀末以降、西洋中心主義批判が盛んに行われたという歴史的経緯から、そのような非対称性は、もはやとるに足らない、すでに乗り越えられた論点だと見る向きもあるかもしれない。理論的にはそうかもしれないが、「経験」の見地からは必ずしもそうではない。別の言葉で言えば、英仏独語といった西洋の言葉を学んで、ポストナショナル、ポストコロニアルの議論を理解し、「国民国家」や「主体」といった概念や、「西洋」や「日本」という比較研究のコーパスそのものを疑問視してそれをお払い箱にすることはできても、それとは別の次元で、外国語で日本文化を知らしめることの必要は残るということだ。

日本の知識人の作品、何よりも知識人自体の存在を仏語で世に知らしめる必要があるという前提から、ジュネーブグループの研究会はスタートした。しかし、何かたたき台や雛形になる入門書的な書籍を使用したわけではなく、日本の知識人といっても、誰を選ぶのかという点からのスタートであり、戦後思想という大きな枠組みの中で、当書には収められなかった吉本隆明や柄谷行人などの名前も当然紹介すべき思想家としてあげられた。1950年代の、もしくはそれ以降の批評という限定も、研究会発足当時は存在せず、それはあとから、成田龍一氏の解説をつけるかたちで、後付けされた構想だった。本書の目的について、日本の代表的な戦後の知識人の作品紹介を行うと言いながら、丸山眞男の作品がひとつも入っていないというのも、見切り発車のそしりを受ける要素になるかもしれない。

２　加藤周一「日本文化の雑種性」の翻訳

この翻訳プロジェクトと同時並行で、研究会とは別の場所で、スイリ氏は、当時（2011－2012年）、ジュネーブ大学に在外研究中だった三浦信孝教授（中央大学名誉教授）とともに、加藤周一の「日本文化の雑種性」を翻訳するゼミを主宰しており、筆者も院生とともにフランス語の訳文をつくることに協力した。そのときにまず筆者が気がついたことは、この翻訳が、日本の読者が共有しているであろう前提を共有しない者に向けてのそれであったということだ。

例えば、「日本文化の雑種性」には以下のようなよく知られた箇所がある。

> 原理に関しては、英語の文化も、フランス語の文化も、純粋種であり、英語またはフランス語以外のものから影響されていないようにみえる。そして多くの英仏人はそのことを多少とも自覚している。そこから一種の文

化的国民主義が発達する[1]。

英仏文化が「純粋」であるという加藤の主張について、ゼミの学生たちの反応は次のようなものだった。すなわち、国を問わず欧州の文化は混交によって形作られてきたのであって、雑種なのはむしろ西洋の方で、純粋性を保ってきたのは鎖国をしてきた日本文化の方ではないか、というものである。例えば、近代化が非西洋世界にとっては西洋化であることは理解できるとしても、西洋、それも限定して英仏文化が「純粋文化」だと言われていることについての彼らの反応は、批判ですらなく、意味がわからない、というようなもので、ここで加藤が書いているように「純粋種」であることを「多少とも自覚している」とはお世辞にも言えない反応であった。

このような反応とは対照的に、日本では、加藤がこのように「純粋」・「雑種」の区分で物事を語ったとき、竹内好からそれは「ドレイ根性」だと、ある意味打てば響く批判がすぐに返ってきたわけで、批判というものは、少なくとも一つの同じものの見方を共有しているからこそ可能になるものだということがそこから理解されるだろう。

時に、筆者自身も、このような予想外の「伝わらなさ」を経験するまでは、西洋と日本の二項対立、両者の比較研究の枠組みというものは、ポストナショナルという理論的前提によって批判し尽くされた、いわば手垢のついた枠組みであって、それを今一度あえて持ち出すことは、勇気がいることだという認識があった。しかし、そのような認識自体が、日本の限られた文脈でのひとつの前提に過ぎなかったのであって、それなくしては何かを共有することすらもできないという問題があったということも、またひとつの「経験」的事実なのだ。

要するに、加藤周一の思想を乗り越えたり批判するためには、あらかじめそれが知られている、何かが共有されていることが必要であるということ、「日本」や「日本文化」やそれに対する「西洋」という、古びた枠組みを、批判して乗り越えて完全に片付けてしまったら、始めることもできない議論というものがあるのではないかということだ。

しかしその種の知の共有を日本の外で企てる時に何が起きてくるか？例えば、ひとりの作家を扱うのに、文学史の入り口であるとさえ言えないような略歴紹介から常にスタートしなければならないということ。そのような状況では、日

[1] 加藤周一『加藤周一著作集』７、７頁。

本の研究者が積み重ねてきた膨大な数の研究書や関連書籍の網羅を前提とした議論を展開することは当然難しいということ。

例えば、この「日本文化の雑種性」の解説を執筆するにあたり、日本国内においては基本的な参照文献であるとされているとされている西川長夫『日本回帰・再論』や戦後史研究で欠くことができない小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』などからの引用を行ったものの、それらが日本語の著作である以上、日本語が読めない読者のために、どこまでそういった情報が有用であるかという疑問もまた残った。

そして、改めて、国内と国外では、なぜかくも知識人の言説の知名度やそれに関わる情報の密度にこうも落差があるのかという問いが筆者の中に生まれた。それは読み手の問題なのか、それとも書き手の問題なのか？例えば、それに関して、小熊英二は、2015年に日仏会館で行われた戦後の知識人に関するシンポジウムで、戦後の日本の知識人が寄稿していた雑誌の読者数の圧倒的な多さが、日本の知識人たちに海外に読者をあえて求める必要を感じさせなかったからだと述べていたし、例えば、加藤周一自身も、著書が複数の言語に翻訳され、あれほど国際派の知識人としての名声をほしいままにしつつも、自身は一貫して、日本人としての共通の問題を前提としてそこからものを書くというスタンスを明確化していた[2]。

しかし、仮に、日本の知識人の言説が基本的に日本国内の読者のみに向けられているのであるとすれば、図らずも、それは先のレ・ベルレットルのスローガンで（批判対象として）前提とされているような「審美的であるだけの日本」という、日本についての悪しきクリシェを、日本の外で温存するのに、もしかしたら寄与した事になると言えはしまいか？

3　丸山眞男「超国家主義の論理と心理」における謎の引用をめぐって

日本の知識人作品の翻訳の実践を通して気付かされたことについて、少し寄り道になるがもう一つ付け加えさせていただきたい。

---

[2] 「要するに、私は日本の知識人の中で暮らしている。またそのことに満足している。どうして私の考える限りでの日本の知識人に美点のないはずがあろうか。無論私自身に即して言えば、そこには第一に外国の知識人との間には考えられない連体（ママ）の意識がある。それは、私が日本人であり、われわれの間には、日本人としての共通の問題があるからである。問題と同時に責任も権利もあるだろう。私がものを書く事に意味があるとすれば、それもそういうことを前提としての話である。」（「西洋の知識人と日本の知識人」、『綜合』創刊号、東洋経済新報社、1957年、225頁。）

そのひとつは、丸山眞男についてである。前提書は、当初は、日本の戦後知識人の、最も有名な、必読の作品、教科書的な意味で重要な作品を紹介するという計画で進められていたので、当然、丸山眞男について、中でも、1946年の有名な論文「超国家主義の論理と心理」の翻訳の再録及び解説の収録が検討された。(結論から言えば、この論のために準備された翻訳及び解説は本書に収められることはなかった。) 丸山のこの論考の再読、再翻訳の試みを通して、筆者が気がついたのは、以下の「超国家主義の論理と心裡」の冒頭部に位置する、19世紀プロイセンの思想家・労働運動指導者フェルディナント・ラッサールの引用をめぐる一つの謎である。

> 「新らしき時代の開幕はつねに既存の現実自体が如何なるものであったかについての意識を闘い取ることの裡に存する」(ラッサール)

丸山は、この引用に続けて、これなしには「国民精神の真の変革」はなし得ない、と述べている。そのように言われている以上、この引用は丸山の方法そのもののと重なる、もしかしたら、自身の方法論のついてのインスピレーションを得たかもしれない重要な箇所であるはずだが、翻訳を行う中で、この引用の出典がどうしても分からない、ということが判明した。もちろん、1862年の *Zur Arbeiterfrage* (労働者綱領のタイトルで小泉信三訳が1928年にあるもの) にあたりをつけたものの、「新しい時代の開幕」という言葉がBeginn、Anfang、Einweihung、Inauguration のどれか、特定することができず、結局、この引用の出典を筆者は自らの手で調べることができなかったので、恥を忍び、また海外にいるということから生じた大胆さも手伝って、日本の、近代政治思想史の専門家の方々、丸山文庫の責任者の方、岩波文庫の最新版の丸山論集の出版に関わった方など、丸山研究の第一人者と思しき方々にこの件についてお尋ねした。しかし、全ての方から、この箇所は、出版のために直前まで調べたけれども結局特定に至らなかったという回答をいただいた。2015年に岩波文庫から満を持して出版された最新版は、そもそも『丸山眞男集』にはなかったヘーゲルなどの出典の注を補完するなど、大変な注意を払って作られたものである。それゆえ、筆者には、この有名な論考の最初の引用の出典が、今現在も不明であるということを、高みに立って批判したり、そうする権利などもちろん無い。それよりも、興味深いのは、世に出てすでに75年以上経っているにも関わらず、この箇所の出典については完全に不問のまま、この論考が多くの読者に必読の

書として受け入れられてきたという事実の方である。

改めて目を留めてみると、この引用は注釈なしには読めば読むほど文意を解することが困難なものである。丸山のラッサールへの目配せは、一体どこからきたものなのか。丸山が戦中に東大で出席した河合栄治郎の講義からインスピレーションを得たものだったのか。ラッサールの非マルクス主義的立ち位置について考えたとき、丸山がラッサールに親近感を覚えていたと想像することは自然であると言えるが、では、この引用は、丸山の門下の間では、暗黙の了解として誰もが知る一文だったのか、もしくは、基礎的文献からの抜粋ではないのなら、それについて、生前の丸山に質問する者はなかったのか。

一般に、戦後の二大知識人である加藤と丸山を比較するひとつの論点として、両者の大学制度内での迎えられ方に違いがあることが指摘されたりする。つまり、日本のアカデミズムの外にいた加藤と内部で多くの門弟に恵まれた丸山という構図である。しかし、それでは、丸山のこの論考のこの箇所は、丸山の周囲においてなぜ不問にされてきたのか？

このような疑問は、とりわけ、ある著作を外国語への翻訳を企図したときに、浮上する問題である。残念ながら、既存の英仏訳をみる限りでその意識があるとは思えないが、ドイツ語の原文の出典を調査しそれを参照することなしに翻訳は不可能であるはずだからだ。

ここでは、差し当たり、少なくとも翻訳作業に関わらなければ素通りしていたであろうことを意識し、日本の知識人が大衆を啓蒙するために書いたとされる批評の言説というものの非常に特殊な受容のあり方を垣間見たと言うことを記しておきたい。

一般に、専門研究では、翻訳を確かなものにするために、まず引用箇所については出典を特定しなければならない。しかし、それとは対照的に、批評はある種、引用された原文が持っているざらつきを解消して、いわばそれが翻訳であるという事実を不問にする種類の言説であると言えるのではないか。

4　加藤周一と「ほんやく」の問題

翻訳の実践におけるもう一つの気づきについては、加藤周一の「日本文化の雑種性」の中の、以下の箇所に関わることである。

> 日本の文化の雑種性を整理して日本的伝統にかえろうとする日本主義者の精神がすでにほんやくの概念によって養われた雑種であって、ほんやく

の概念をぬきとれば忽ち活動を停止するにちがいない[3]。

この箇所の仏語訳は、研究会で次のように決定された。

> L'esprit de ces nationalistes, qui veulent se débarrasser du caractère hybride de la culture japonaise en revenant à la tradition, est lui-même abâtardi, parce qu'ils ont appris à penser grâce à des « mots de traduction » et que, sans ces concepts, nul doute qu'ils devraient arrêter toute activité[4].

上記のように「ほんやくの概念」の訳語を、カッコつきのmots de traductionにして、そこに注をつけている。その理由は、実を言うと、研究会では、なぜこの部分の「ほんやく」という言葉がひらがな表記なのか、ということに明確な回答を与えることができなかったからである。正直、最初は誤植か、翻訳の旧漢字が難しいからか、そんな意見が出たが、研究会で議論したものの、その理由を特定するには至らなかった。結局、「ひらがなであるということを一応は意識した」という意味で「ほんやくの概念」の箇所全体を括弧で括って、mots de traductionと訳出したものの、「翻訳」という言葉は、特に説明を要するような新造語ではないので、括弧で括るというのも適切ではなく、いかにも苦肉の策であったと言わざるをえない。

なお、この「ほんやくの概念」には、以下のようなこのような注（13番目）がついた。

> Après l'ouverture du Japon, il a fallu pour traduire les concepts de base de la pensée occidentale créer de nouveaux mots, soit des expressions chinoises détournées de leur usage premier, soit de pures créations *ex nihilo*. C'est ainsi que sont apparus des mots comme *shakai* (société), *keizai* (économie), *jiyû* (liberté), *tetsugaku* (philosophie) ou encore *kenri* (les droits). Sans ces « mots de traduction », il serait impossible de penser aujourd'hui en langue japonaise. La plupart de ces termes ont été à leur tour adoptés en chinois, en coréen et parfois même en vietnamien[5].

---

[3] 加藤周一『加藤周一著作集』７、10－11頁。
[4] *La trajectoire du Japon moderne. Regards critiques des années 1950,* p. 40.
[5] *Ibid.*, p. 166.

（開国後、西洋の思想の基本概念を翻訳するために、中国語の表現の転用やあるいは無からの創造で、新たな言葉を作り出す必要があった。「社会」「経済」「自由」「哲学」「権利」といった言葉は、こうして生まれたのである。この「ほんやくの概念」なくして、今日、日本語で考えることは不可能であろう。これらの用語の多くは、中国語、韓国語、そして時にはベトナム語にも採用されている。）

この文の解釈のもう一つの難点は、この「ほんやくの概念」が、作者によって、「日本主義者」という、特定の思想家の著作や概念を表す狭義の意味ではなく、広い意味でテマティックな概念に結び付けられていることからも来ている。この箇所についても、そのまま直訳しても全く意味不明ということで、このような注（10番目）がつくこととなった。

Ici, Katô utilise le terme *nihonshugi-sha,* mot à mot les « nipponistes », que nous traduisons par « traditonalistes ». Il s'agit d'une des nombreuses manières de désigner en langue japonaise ce que nous regroupons généralement sous le terme de « nationalistes »[6].

（ここで加藤が使う「日本主義者」という用語は、字義的には、国名である「日本」（にっぽん）に係る主義者であるが、我々はそれを「伝統主義者」と訳す。それは、日本語で「国粋主義者」という言葉に通常は集約されるものを日本語でいい表す方法の、数多くあるうちの一つである。）

結果的に、日本の近代化は西洋語の翻訳を必要し、新しい言葉を創造したというようなニュートラルな歴史的事実確認の注をつけることになったが、果たして、それでよかったのかという疑念は、筆者の中に、本書が刊行されてからも残った。確かに、この注は、丸山眞男と加藤の共同編著『翻訳の思想』やそこから派生した『翻訳と日本の近代』に展開されているような、明治初期の翻訳文化に近代化の中核を見るような仕事への目配せは含んではいる。しかし、それだけでは、加藤がわざわざ翻訳をひらがなで表記している微妙なニュアンスを説明し尽くしたことになるのだろうか？

---

[6] *Ibid.*, p. 165.

加藤が翻訳をひらがな表記で書いているのは、この雑種文化論が書かれた時代、加藤の人生の年表の区分で言うと1955年から1960年の間の二つの海外渡航に挟まれた時期に集中している。もちろん術語としてシステマティックにひらがなで表記されているわけではなく、例えば、雑誌掲載の際は、加藤による本文の表記はひらがな、雑誌の目次および各章の題名には、漢字表記（旧漢字：飜譯）が使用されている。このことから、出版媒体での表記は、漢字の表記がむしろ一般的であったことが窺い知れる。しかしながら、加藤自身が、それをひらがなで表記することに何も明確な説明を与えていないし、編集の上であえて表記の統一を行なった形跡は見られない。少なくとも言えることは、加藤自身がこの言葉をひらがなで書いている時の議論は、翻訳のもつ積極的側面よりは否定的なそれを強調するためにされていることが多いということだ。

「ほんやく」を揶揄するその顕著な例が、1956年に文藝春秋に掲載された評論「ほんやく文学の偉大と悲惨　その影響の深さと強さ」であり、この文章においては、明確に「西洋文学の影響の強さと深さ」は「翻訳の盛況」と「逆比例」すると述べられていて、日本には「ほんやくに人々が与える特殊で重要な意味」があるとか、翻訳は「学問ではない」にもかかわらず、「忽ち学問的成果となりかねない不思議な空気」があると述べられている[7]。

また、「日本文化の雑種性」とは、「近代の超克」批判の点で連続性を持つ評論である、1959年の「戦争と知識人」においては、「フランスの小説は、うれしそうに国民服を着た東京のほんやく業者が、『このフランス小説の頽廃的な面をわれわれは批判しなければならぬ』などと『解説』しながら、ほんやくすることもできるものである」[8]と言われており、ここでもまた、ひらがな表記の翻訳が完全に否定的な意味で使われている。

加藤のこの翻訳批判の傾向がどこから来たかのかと考えるとき、それは『1946年・文学的考察』における、いわゆる星董派批判に遡るもので、「リルケが流行したのではなく、徹底的に誤解されたリルケが、翻訳を通して、合言葉になったのである」という箇所がそれに当たる[9]。『レトリックの戦場　加藤周一とフランス文学』(2021年）の著者・岩津航はそれを「1946年の反翻訳主義」あるいは「マチネの反翻訳主義」という表現で指摘していた[10]。たしかに、この時期

---

[7] 加藤周一「ほんやく文学の偉大と悲惨：その影響の深さと強さ」、『文藝春秋』34（６）、1956年、124頁。
[8] 加藤周一『加藤周一著作集』７、322頁。
[9] 加藤周一『1946・文学的考察』、19頁。
[10] 「加藤周一とフランス文学：1940年代後半の「理性」と「民主主義」」、『金沢大学歴史言語文化学

の加藤には、星董派の無知と無学への批判の態度、原典を読めない一般読者と自らを含むマチネ同人の間の差別化の態度があった。この反翻訳主義がそのまま原典主義として戦後も維持されたかどうかは別の話かもしれない。しかし、確かなのは、加藤は以後も繰り返し戦中のリルケの流行は単なる「現実逃避」[11]であり、それが翻訳の概念の一人歩きによってもたらされたことを指摘してきたことである。差し当たり、加藤は、マチネ時代の痛烈さこそないものの、戦後に戦前との知的状況の連続を見て、それを危惧していたと言える。

加藤の翻訳というものへの評価は常に両義的である。そのことは、『翻訳の思想』やそこから派生した『翻訳と日本の近代』で、彼が翻訳文化は「独創を排除せず」、「国の自立性を脅かさない」し、むしろそれを「強化」するということは認めつつも[12]、近代日本のケースは外国語から日本語への「一方通行」だったという批判を行い、わざわざ内田義彦の「日常の話し言葉と学問的な概念の繋がりの不在」の議論を引き合いに出して「近代日本語による思想的創造性」よりもむしろその「限界」を指摘していることからも窺い知れる[13]。

加藤にとって、翻訳は、最小単位の外来思想の受容である。つまり、加藤の翻訳というものへの警戒は、外来思想の表面的な受容に対する警戒と同義である。そして、加藤の批判は、次のような地平に行き着く。先にあげた評論「ほんやく文学の偉大と悲惨　その影響の深さと強さ」で述べられているように、「フランス文学の翻訳者は仏文学者と同義ではない」し、また仮に仏文学者であったとしても、「フランス文学は」「純粋に抽象的な技術としても学び得るもの」であり、それはあくまでも日本の大学制度の話であり、その技術の習得は、「７月14日のフランス」と加藤が呼ぶ、いわばフランスの思想の最良の部分の「肉体化」ではない[14]。（この「７月14日のフランス」とは、1950年に刊行された著作『文学とは何か』の表現では、「個人主義」の原理であると言い換えることができるものだろう。）

加藤は、この思想の「肉体化」を、別の言い方で「体得」と表現してもいる。例えば、1951年「思想を体得するために」の中で、宮本百合子を例に、思想の「体得」が日本思想の問題を考える全ての人に教訓的だと述べ、「それは論理が

系論集：言語・文学編』第10号、2018年、79－90頁。

[11] 加藤周一『加藤周一著作集』７、33頁。

[12] 加藤周一・丸山眞男『翻訳と日本の近代』、187頁。

[13] 加藤周一・丸山眞男『翻訳の思想』、371頁。

[14] 加藤周一『加藤周一著作集』７、321頁。

どこまで綿密であるかということにではなく、論理をどこまで生きるかということに係っている。思想がどれほど体系的であるかということにではなく、思想がどれほど感覚とむすびつき、感受性そのものにまで浸透しているかということに係っている。およそ近代思想と日本人の意識との出会いにおいて、常に、それほど深く、それほど決定的な問題はない」[15]と述べている。

いずれにせよ、この「体得」や「肉体化」の重要性の強調にもかかわらず、「戦争と知識人」(1959年）の「「ブリッジ」と「７月14日」」の章で具体的に書かれていることは、それが、万人に適用可能な方法としてどうすれば可能になるかではなく、少なくともかつて何ではなかったか、であった[16]。例えば、永井荷風は個人主義を体得していた例外的存在である、という論旨は、表面的な西洋思想の本の読書だけでは、個人主義は培われ得ないと言わんばかりのものである。思想の「肉体化」や「体得」を語るこの時期の加藤の言説には、ある種の神学的構造がある。それは、思想は常に我にあり、他には必ずしもあらず、という批評家の身振りである[17]。

しかし同時に、この思想の「肉体化」という要請自体は、決して加藤の発明ではなく、それは、例えばむしろ加藤が真に論破する必要を感じていた小林秀雄によって既に意識されていたものだった。加藤自身は、無論その事に意識的であるが故に、小林の批評は、「フランス文学を看板にしていた人」よりも「一枚上手」であって、それはフランス文学の完全な「消化」や「応用」、そして「高級な翻訳」であると述べているが、加藤はそれは結果「剽窃スレスレ」でもあるとも言っている[18]。このような発言を読むと、加藤は、思想の何を肉体化するかという点で全く逆の結論を導き出すに違いないとはいえ、戦後のこの時期のフランス文学研究者よりも小林を評価しているとさえ言える。

「戦争と知識人」に顕著であるこの思想の「肉体化」の要請は、近代日本において西洋思想の受容が徹底されることがなく、常に知識人の「思想」と大衆の

---

[15] 関西学院新聞（1951年11・15号）掲載後、『宮本百合子全集』(全29巻・新日本出版社）の付録として掲載された。

[16] 加藤周一『加藤周一著作集』７、319－329頁。

[17] 中野綾子は、「堀辰雄ブームの検証：学徒兵の読書行為と愛読者批判の構造」(63頁）において、加藤を含むマチネポエティクによる堀辰雄の一般的な読者に対する批判が「自らが愛読者よりも深く堀辰雄という作家を理解しているという特権を示そうとする特徴がある」ことを指摘した。このような「特権」の要請は、「文壇内での立場を保つための行為」であり、読書行為のみならず批評行為にも関わることである。

[18] 加藤は、小林がNRFの書き手でありコラボの作家ラモン・フェルナンデスから着想を得ているものの、それを巧妙に隠していると指摘している（加藤周一・凡人会『戦争と知識人読む』、263頁)。

「生活」が乖離してきたという批判を前提としている。かの有名なカール・レーヴィットによる「二階建て」の指摘[19]は、戦後（吉本隆明の時代に至るまで）、知識人の戦争責任を問う文脈で、日本の知識人が西洋由来の近代の原理を内面化しえなかったことを批判するためのオーソドックスな方法の一つとして受け継がれた。その文脈においては、加藤は、「思想」と「生活」の乖離を前に、前者の後者に対する無力を嘆くのではなく、「思想」の只中で「思想」と「生活」の乖離を無くさなければならないという立場をとった者だと言えるだろう。

このような加藤に対して、海老坂武は、著書『戦後思想の模索』の中で次のような批判をおこなっている。あらかじめ補足すると、彼の加藤批判はほとんど深い共感と同義であるようなものであるが、外国文学研究者の立場から海老坂武は「思想と生活の食い違いを、思想の外来性のせいにしてはなるまい」[20]と述べて、その食い違いを「思想→体験→生活の下降運動」によって克服することができるという「信念」がなければ、思想を受容することの只中にその「体得」の可能性を見ないのであれば「観念が外から人間を摑む可能性を信じないで、どうして翻訳をしたり紹介をしたりの文筆の仕事にたずさわりえよう」、また「加藤氏はどうして翻訳をし、外国の文学・思想について語るのか」[21]と問いかけた。たしかに、加藤自身も一時期、フランス文学解説やコンディヤック、ヴェルコールやサルトルの翻訳を率先して行っていた時代があった。それらを彼は非本質的な仕事だと思っていたのかと海老坂は問いただしているのだ。

加藤が退けているのは全ての外来思想の受容ではなくて、いわば無邪気な、機会主義的なそれであって、受容は仕方や用法によっては無駄にも害にもなるという意識を不断に持ち続けること、その確認それ自体が、彼の批評の言語を形作っていたのではないか。

たしかに、海老坂武は、思想を「輸入できないもの」であると書く加藤の「文化の自発性信仰」を批判する。しかし同時に、加藤も海老坂同様に「思想を受容することの只中」にもちろんその「体得」の可能性を見ていたと言える。すなわち、加藤において、思想は、外来か自発かというスタティックな二項対立では捉えられない動的なものであると考えられていた。

---

[19] カール・レーヴィットが1940年、日本から去るにあたって、雑誌『思想』に寄稿した「ヨーロッパのニヒリズム」からの表現。日本人は１階では日本風に生活し、２階では西洋風に思考するが、両階を繋ぐ階段はないというもの。

[20] 海老坂武『戦後思想の模索』、152頁。

[21] 同書、152頁。

加藤は、外来思想の受容という場合、理解の程度の差や真偽だけが問題となるとか、本来受け取るべきものは一つしかないなどと考えていたわけではない。彼には、人が何を受け取るかは状況によって必然的に異なるからそのことを絶えず意識せよ、という姿勢がある。彼は、ある固有名なり作品名なり用語なり概念なりを、他者との共通理解を想定したある種の符牒や合言葉、今風にいうと思想タームして使うことに対して非常に慎重だった。

加藤が意識するのは、自分が何を書くかということ以上にどう書くかということであって、それは彼の「道具」と「仕事」の区別という話にあらわれている[22]。加藤によれば、「道具」つまり概念を学びそれを蒐集し読者に提示することは決して「仕事」と同義ではなく、そうした「道具」に自ら改良を加えて準備をし、何かを書かなければならないというわけで、この「道具」と「仕事」の区別から、外来思想の受容はあくまでも舞台裏の操作であるという加藤の姿勢、何かを受容するという事に対する懐疑に近い慎重さが染み透っているエクリチュールが生まれてくる。

しかし、そのような作業は、同時に、先ほど、一つの丸山の引用ついてのアネクドットでもって仮説として提示したような批評言語の性質、つまり、引用の原文がもつある種のざらつきを解消していくことによって、翻訳の次元を不問にしていくような傾向を生じさせるだろう。

5　加藤周一の批評と母語の問題

今後、加藤の批評言語の性質については、彼がひとつの専門におさまりきらないほど博覧強記だったとか、はたまた彼は評論家や作家であってアカデミズムとは距離があったというのとは別の観点から、さらにテクストに内在的にさらに分析する必要があるだろう。ここでは最後に、加藤がものを書くという、その「仕事」のスタンスについて、差し当たりそれを国籍や母語との関わりとともにまず考える必要があるいうことだけを指摘しておきたい。

以下の引用は、1976年の森有正の死後に追悼文の意味合いで書かれたもので、題名は「単純な経験と複雑な経験　ある哲学者の死によせて」という、1977年初出の文章からのものである。1956年の『運命』という、海老坂武に倣って言えば、森と加藤という二人の戦後思想の模索者の分岐点について様々な暗喩を含むかの有名な小説からはだいぶ時間も経過しており、加藤自身もこの頃は欧

[22] 加藤周『加藤周一著作集』７、251頁。

米の大学で教鞭を取って色々な場所を自由に行き来していたまさにその時期に書かれているものだ。終わりの方のこの箇所は特に加藤のスタンスを明示していて、とてもよく知られている。

> 思考の対象が、日本の社会と文化でなければならぬという原理的な根拠は全くない。しかし実際的な理由はいくつかある。そのなかで重要な第一の理由は、外国人の立場の限界である。外国人は社会を観察することができるし、またそこで生きることもできる。しかしその社会に参画することは、かぎられた面においてしかできない。しかるに参画が全面的でないということは、責任が全面的でないということでもある。思考の対象が、自然ではなく、歴史や社会であるときに、無責任状態は、その思考の内容を限定するだろう。その種の限定をどうしても避けようとする外国人は、おそらく内省的にならざるをえない。しかし内省的思考は深化し得ても発展することはできない。なぜなら複雑な経験は、個別的な特殊な条件のもとにおこり、その内省的な分析のみによって、普遍的な世界とのつながりを見出すことは、おそらく不可能だからである。個人の内面は必ずしも世界の秩序を反映しない。私はその意味で浪漫主義の前提を誤りとする。重要な第二の理由は、言語の限界である。外国語は母国語にはならない。したがって外国語による表現は、母国語による場合とは異なる制約を受ける。その制約が重大な障害にならないような知的活動の領域は広いが、そのことは制約の不在を意味しない。また言葉には文化の歴史が含まれていると同時に、個人にとっては個人の歴史もまた含まれている。したがって、社会に対してのみならず、言葉に対しても、同時に例えばフランス人であり、日本人であることはできない。いずれかを択ばねばならず、しかも択び得るのは少青年期であってそれ以後ではない。私自身についていえば、私はあらゆる特定の文化を相対化するから、偶然的にあたえられた文化的国籍を変える必要をみとめないのである[23]。

森有正の「感受性に忠実に思考しようとする努力」、つまり先に確認した加藤の言葉で言うと思想の体得を目指していた点に、おそらく加藤は深く共感しつつも、森がその努力をあえて外国で行ったことに、加藤は積極的意味を見出さ

[23] 同書、252頁。

なかった。しかし、たとえば、外国に暮らすことを選択した場合、生きることはできるけれども社会参画は限られ、外国人には「内省的思考」のみが可能であり、それだけでは「普遍的な世界とのつながりを見出すことは、おそらく不可能」だということは、どういった次元で言われているのか？

この問いは、そのまま「日本人の」知識人は日本の「連体（ママ）」から自由である資格を持たないのか、また、その「連体」の中でしか言論活動を行うことができないのかどうか、という問いにも関わるだろう。

加藤はここで端的に「社会に対してのみならず、言葉に対しても、同時に例えばフランス人であり、日本人であることはできない」と言っているが、それは単なる国籍条項に基づくものなのか？もしそうであれば、多重国籍を認めない、日本という国の特殊なあり方を指してそう言っているのだろうか。それならば、加藤は、この文の主語を、少なくとも、日本人は、と限定すべきだっただろうし、そもそも、文化的国籍と母語が結びつかねばならない必要はどこにあるのか？

このような1970年代の加藤の認識やそれを問うこと自体が、既にグローバリズムの時代には古びた時代認識であると、単に人は失笑するかもしれない。ではむしろ、例えば20世紀末に酒井直樹が言っていたように「国民的、民族的、言語的帰属を当然視せずに言える共同体の「われわれ」を樹立するための語りかけを探索する」[24]ことを目指すべきなのか。

筆者は、差し当たり、これらの問いへの答えを持たない。しかし、確かに言えることは、知識人の「社会参画」と彼らが生成したテクストの「受容」の問題は、切り離して考えるべきであるということだ。母語で書かない、もしくは、十全な「社会参画」の機会を持たない外国人による著作が、社会から大きな反響を得ることは大いにありうるし、加藤の著作が、加藤自身が想像しなかったようなかたちで読み継がれる可能性もある。筆者は、まさに、加藤の作品のフランス語への翻訳作業に関わったことで、ある著作が場所により異なった方法で受け取られるという経験を得た。読解（さらに言えば批評）は、必ずしも受容の「程度」の問題には還元されないような積極的かつ創造的な側面を含みうるだろうが[25]、それが含み持つ「希望」について論じることは他日に譲りたい。

---

[24] 酒井直樹『日本思想という問題』、15頁。

[25] 2021年に刊行された劉争『「例外」の思想　戦後知識人・加藤周一の射程』は、日本国外の文脈から外国語で思考されたひとつの読解であり、これまで主に日本国内で議論されてきた加藤の思想理解（それは国内でのみ通じる符牒だけを生む装置ともなりうる）に対して一石を投じるような性格を持つ作品である。

追記

本稿は、2022年３月静岡大学で行われた翻訳文化研究会での講演をもとに、加筆修正を加えた論考である。

参考文献

Japon colonial 1880-1930. Les voix de la dissension, sous la direction de Pierre-François Souyri, Paris, Les Belles Lettres, 2014.
La trajectoire du Japon moderne. Regards critiques des années 1950, sous la direction de Nicolas Mollard, Paris, Les Belles Lettres, 2018.

小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉―戦後日本のナショナリズムと公共性』、新曜社、2002年。
海老坂武『戦後思想の模索　森有正・加藤周一を読む』、みすず書房、1981年。
加藤周一『文学とは何か』、角川書店、1971年。
加藤周一『加藤周一著作集』７、平凡社、1979年。
加藤周一・凡人会『戦争と知識人読む　日本思想の原点』、青木書店、1999年。
加藤周一『1946・文学的考察』、講談社、2006年。
加藤周一・丸山眞男『翻訳の思想』、岩波書店、1991年。
加藤周一・丸山眞男『翻訳と日本の近代』、岩波書店、1998年。
酒井直樹『日本思想という問題：翻訳と主体』岩波書店、1997年。
中野綾子「堀辰雄ブームの検証：学徒兵の読書行為と愛読者批判の構造」、『日本文学』62（11）所収、日本文学協会、2013年、55－66頁。
西川長夫『日本回帰・再論―近代への問い、あるいはナショナルな表象をめぐる闘争―』、人文書院、2008年。
丸山眞男『超国家主義の論理と心理　他八篇』、古矢旬編、岩波書店、2015年。
劉争『「例外」の思想　戦後知識人・加藤周一の射程』、現代図書、2021年。